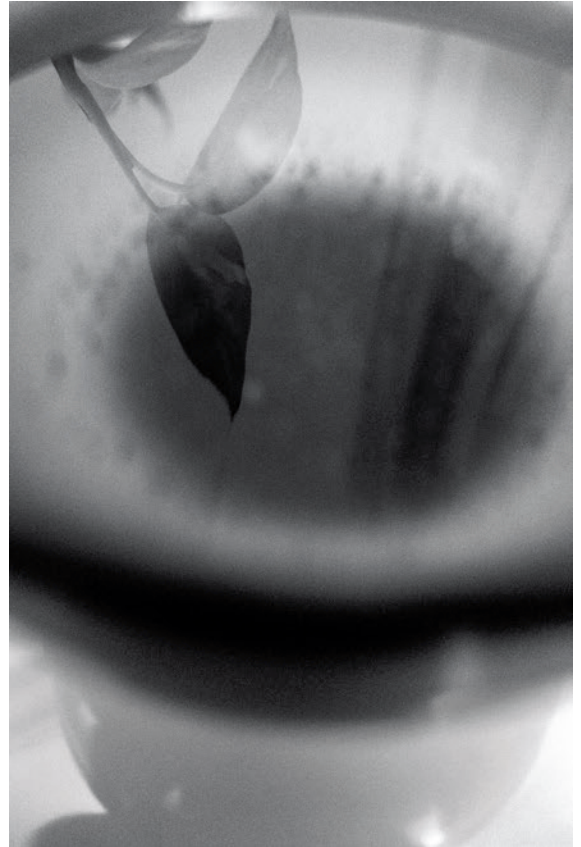


慈濟

ものがたり

ツーチー 2019年6月 270





● 表見返し 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黄筱哲

仏の教えを受け継ぎ、 衆生を済度して福をもたらす

食に知足すれば、全てが甘露のように感じられます。

清らかな口からは敬虔な妙法が出てきます。

心を広く善に解釈し、善行して福をもたらすよう呼びかけましょう。

仏の教えを受け継ぎ、衆生を済度し、愛を啓発するのです。

目次

【社論】	
小さいながらも堅固な力を発揮する	慈願／訳 4

【主題報道】	
慈済が種粃配付	黒川由希／訳 8
ミャンマーの農家四万世帯が農耕を再開	
貯米の経済学	惟明／訳 30
困窮の背後に広がる無限の希望	心嫻／訳 44

【親と子と教師、三者の本音】	
子供に友達がいらないことが心配	本諦／訳 51

【二つ屋根の下】	
言っていけないことは言わない	慈願／訳 56

【人物誌 台湾台中】	
前科を改め清らかな人生を送る	心嫻／訳 64

【高齢者は問題ない】	
ハンゲグライダーのように 晩年を優雅に飛ぶ	惟明／訳 80

【證嚴法師のお諭し】	
水滴が集まって河となり、海に注ぐが如く、 苦難の衆生を慈悲の舟で彼岸に渡す	慈願／訳 94

【衲履足跡】	
心深く愛を植え付ける	済運／訳 100

慈済大事記【五月】	済運／訳 105
-----------	----------

表紙



ミャンマーでの慈済活動では「貯米箱の里帰り」活動が恒例行事の一つになっている。子供たちは喜んで列に並び、貯米箱に貯めた米を米の山に注ぎ、集めた米で人助けをする。

小さいながらも堅固な力を発揮する

周囲を海に囲まれた台湾では、海が美しい自然景勝地を提供している。しかし、賑やかな時間が過ぎた後は、往々にして取り返しのつかないほど環境が破壊されているものだ。四月中旬に行われた澎湖島での花火大会は、改めて観光と環境保全を如何に両立させるかという問題に直面した。

十数年来、花火大会は澎湖島に大きな観光収入をもたらしてきたが、大量のゴミも産出してきた。狭い離島のゴミは船舶で台湾本島に運ばれて焼却されているが、コストが高い上、お金で解決できるとは限らない。例えば去年

の花火大会では、前夜に高雄の焼却炉が故障したため、澎湖島のゴミは島に山積みされるしかなかったのである。

欧米や日本では既にゴミを燃料にする技術が広まっている。澎湖県環境局も同様の設備を取り入れたが、現地の資源回収率が低かったため、失敗に終わった経緯がある。資源の回収とゴミの減量が根本的な解決策だが、人々の習慣を変えるのは極めて困難である。

環境保護署のビーチ清掃に関する資料によると、プラスチック製品が近年の海洋廃棄物の大部分を占めている。国連が二〇一五年に作成したマイクロプラスチックによる影響推測図を見ると、台湾は最も密集した「赤色海域」に位置し、季節的な風や海流の流れに乗って海洋ゴミが集まってくる。それ

ら海洋ゴミの八割は陸地から来ており、人類が利便性を追求した結果であると言える。

花火大会の行われる前、慈済人医会の医師が澎湖へ施療に行った時、海岸にゴミが溜まっているのを見て、現地の人たちにリサイクル活動を呼びかけた。その様子を慈済月刊誌の記者が取材し映像におさめた。映像には整理しきれないゴミ以外に、長年変わらない環境保全ボランティアの姿があった。このストーリーは「二七二号」に特集として報道されている。

彼らは高齢で腰が曲がっても、相変わらず環境保全の責務を果たしている。例えば、船長の石龍耳を紹介しよう。彼は出港時に必ず船員に資源を回収し、時間のある限り地元住民と共に回収物の整理に参加するよう呼びかけている。そして分類した物を自分の船で慈済のリサイクルセンターに運んでいる。

少校を退役した薛佩麒は以前、馬公の北辰市場で八百屋を営んでいた。七十を過ぎた頃に環境保全ボランティアとなり、絶え間なく投入していた。四年前に交通事故で亡くなった後も、その環境保全の心願は他のボランティアに引き継がれている。八十歳近い陳楊専は毎日海岸に行って海洋ゴミを拾っている。吉貝島で初めて環境保全を始めた欧素卿は、脊髄手術した後だけは暫らくボランティアを休んでいたが、片時も忘れたことはない。

澎湖の環境汚染は日増しに酷くなり、マイクロプラスチックを含む海洋廃棄物はもはや浜辺を清掃し切れないほど多くなっている。現在の消費至上の時流の下、環境保全ボランティアの姿は取るに足りないものかもしれないが、真に問題解決する根本の道を歩み、小さいながらも堅固な力を発揮している。

（慈済月刊六二九期より）



文・張麗雲（台中人文真善美ボランティア）
 撮影・蕭耀華 訳・黒川由希

慈済が種粃配付

ミャンマーの農家四万世帯が農耕を再開

ミャンマーの農民は代々、借金して作付を行い、収穫後返済する生活を強いられている。そこへ異常気象による災害が重なり、稲作農家で

さえ食べる米がないのだ。

ミャンマーは世界の米どころの一つであり、もし農民が耕作を放棄すれば、長期的に世界の食糧供給に影響する。

慈済は被災した農民が農耕を再開できるよう厳選した種粃を配布した。収穫後は「翌春の種粃」として保存され、人々に米が残ることを期待した。

●車窓の外は見渡す限りの田園だが、乾季で辺り一面黄土が続く。車の窓ガラスにはミャンマーの地図が描かれていた。ミャンマーは2018年に大水害が発生、ヤンゴン省、バゴー省、モン州、コロン州が大きな被害を受けた。慈済は今年2月中旬から4万7千世帯余りの農家に種粃の配付し、8万ヘクタールの農地が恩恵を受けた。

●ミャンマーのカコロン州にあるこの寺院では、慈済が準備した種粃が仏塔の周囲一杯に積まれていた。これらは4万世帯の農民を対象に、台湾、ミャンマー、マレーシアのボランティア400名が力を合わせ、クラウド技術を用いた配付システムを使い、現地政府のサポートを得て10日間で配付を終えた。



慈

「済は最高の種籾を配布してくれました。何だか夢を見ているようです」。

バゴー地区キョクタカー村のミント村長は、八畝の田が去年の夏の水害で冠水し、収穫がなかった上に、種籾を買った借金も返済しなければならず、大きなプレッシャーが掛かってどうしようもなかった時に慈済が配付に来てくれ、初めは半信半疑だった。「多くの慈善団体から種籾を寄付するという話がありました。が、その後なしのつぶてでしたから……」。これは決して夢ではなく、仏教大国で実際に起きた感動的な物語なのである。物語はエーヤワディー河畔から始まる。

照りつけ、続いて季節風による暴風雨が襲い、河川の氾濫が毎年繰り返される。

二十世紀以降、工業が急速に発展し、人類の物質に対する欲望はますます強まり、森林が過剰に伐採され水保全機能が低下したことで、洪水が起こりやすくなった。二〇〇八年五月二日、サイクロン・ナルギスが三・六メートルの高波を伴ってミャンマーを襲い、世界の米どころの一つであるエーヤワディー川三角州が氾濫、付近の水田が河に飲み込まれた。

農地が水没したことで、農民は収穫がなくなり、生活は困窮した。被災者は十万人を越え、世界を震撼させた。

始まりはサイクロン・ナルギス

ミャンマーといえば、ミャンマー玉が頭に浮かび、華人に人気のコレクションである翡翠の他、全国各地に見られる黄金に輝く仏塔も有名だ。この仏教国家は三方を山に囲まれ、北から南にエーヤワディー川が流れている。その流域面積は国土の三分の一を占め、楽観的でつましい善良な国民が暮らし、特殊な地理環境により資源が豊富で、現在米の輸出は世界ランキングで十位以内に入る。

しかし自然現象は無情で、毎年二月から五月の期間は、灼熱の太陽が容赦なく

ミャンマー軍事政権は当初、海外からの援助を拒否しており、一週間後の五月八日、最初の国連物資の搬入がようやく許可された。五月十日、慈済基金会は入国を許された最初の非政府組織として、マレーシア、タイのボランティアからなる災害現地調査グループを現地に派遣した。こうして慈済のミャンマーにおける慈善の門が開かれた。

都市と農村の経済発展格差

二〇一一年、ミャンマー政府は五千万以上の人口を擁する同国市場への外資受

入を開始し、この新興市場に中国、日本、韓国が相次いで投資を開始した。ミャンマー当局は開発路線を邁進し、二〇一一年に七百米ドルだった国民の平均所得は、二〇一七年には千二百米ドル超にまで増加し、週刊新聞『エコノミスト』で世界の経済成長率ランキングのトップと評されたこともある。

ヤンゴンは最初に開放政策の恩恵を受けた都市であり、ネオンがきらめき、高層ビルが立ち並ぶなど、現代都市の様相を呈している。一見経済が改善したかに見えるミャンマーだが、ヤンゴンから車

●慈済が種粃配付のために借りたバゴー地区の寺。
1人の出家僧が興味深く覗いていた。

で一、二時間の距離にある農村では、様子は全く違っている。

「経済は成長していますが、農民の生活は改善されていません。政府の新建設も私たちとは関係がありません。私たちは農耕するだけですから、ヤンゴンで働けと言われても、都会の生活に適応できませんよ」、バゴー地方域ワウ市象村の農民組織の代表で、老村長のウカウニヤンはため息混じりにこう話した。

農村のインフラは整備されておらず、



都市と農村の格差は拡大するばかりだ。水害は農民の苦しい生活をますます追い詰める。二〇一八年七月、八月、またも大水害に襲われ、影響は広い範囲に及び、ウカウニヤン村長の村も被災した。政府は一時的な支援として、各世帯に十萬チャット（約六千五百円）の補助金を給付した。

二〇一八年九月、台湾、マレーシア、ミャンマーのボランティアが災害現地調査に赴き、農民の大多数が作付のため借金していることが分かった。また田圃を持たない貧農は政府の低利子ローンを申

請できず、また高利貸しから借金していたため、収穫により返済するはずだった債務を水害のため返済できず、食べるための米さえない状況にあった。借金を返済し、農業を再開したいと思っても、種籾を購入する資金がないのである。

事態を見過ごせなかった證嚴法師は、農民が乾季を乗り切るための緑豆の種を配付するようボランティアに指示した。災害現地調査グループ代表の黄秋良は、「乾季の栽培で経済効果が最も高いのは緑豆です。緑豆の収穫後すぐに稲作を行うことができます。慈悲深い

法師は農民の経済と生活が改善するよう、二種類の種の配付を指示したのです」と話す。

二〇一八年十一月十一日から十七日にかけて、ボランティアはヤンゴン（Yangon Region）とバゴー地方域の四つの村で、六百五十三トンの良質な緑豆の種を配付し、一万世帯以上の農民が恩恵を受けた。

緑豆の豊作により苦境が緩和

緑豆を二、三月に収穫すると、続いて五月末から六月初めにかけては稲作の準

備にとりかかる。慈濟人は「よい種籾」を配付したいと願っていたが、買い付けの時、数々の困難にぶつかった。黄秋良は「もともと四社が種籾を慈済に供給してくれていることになっていたのですが、為替レートの変動が大きく、二社から断られ、比較的小規模の一社からは米ドルを受け付けないと言われました。最後の一社の代表者ウマウンミンが引き受けてくれ、彼が他の供給業者を探してくれたお陰で、何とか種籾の買い付けができたのです」と話してくれた。

慈濟人は緑豆の種を買い付けて以来、



1



3



2

ウマウンミンと緊密に連携し合うようになり、配付活動にも彼を招待した。彼と家族は慈善人の無私の奉仕に感動し、「あなた方はよく『一家人』を歌っていますね。『一家人』は単なる比喻だと思っていますでしたが、あなた方は本当に実践しているですね」と黄秋良に言った。

買い付けの難題が解決すると、次は種籾の品質検査である。慈善は、かつてミャンマーで稲作を行ったことがあり、台湾・北投関渡で五十甲の田圃を耕作する洪再生氏に協力を頼んだ。洪氏は自費でミャンマーまでの航空券を購入して価格と品質の管理をサポートしてくれた。

▶ 1・種籾の配付のためにやって来た慈善人が、バゴー地方域の農民と共に緑豆を収穫した。この緑豆の種は2018年の水害後、雨季の稲作前の土地を利用し、農民の収入が増えるようにと慈善が農民に寄付したものだ。

2・緑豆は通常五月の雨季の稲作開始前に収穫する。収穫後の緑豆は天日に干してから、機械で脱穀する。

3・脱穀した緑豆を手にした農民の表情は晴れ晴れとしていた。

ミャンマーの農業部も非常に協力的だった。バゴー地方域ウオ市の農業部長ウアウンモエルウィン氏は、「慈善の提供した種籾の多くは良質なものです。私たちは実験室で品質検査を行い、発芽する種籾を選別し、品質の悪い種籾を淘汰



しました。これにより買い付け量の一割が失われましたが、慈済人の熱心さを見てきましたので、私たちはこの費用を喜んで負担します」と話した。

一ヶ月かけて四千二百トンの種籾を準備し、二〇一九年二月十日から、四つの国と地域から来た慈済ボランティアが、二回に分けてミャンマーで種籾の配付を行った。浸水の痕跡はすでになく、青々

●バゴー地方域のある配付地点で、慈済人と現地の農業局の代表、農民が贈呈セレモニーに参加した。配付地点は多くが寺院で、慈済ボランティアはミャンマーの礼儀作法に従い、靴と靴下を脱ぎ、素足で寺院に入り、敬意を示した。

を行った。当日の夜には、小さな交流会が開かれ、ミャンマーボランティアが用意してくれた緑豆スープを皆で堪能した。「立派な緑豆だなあ！」ボランティアたちは我が事のように喜んだ。

「翌春の種籾」を残す

種籾配付期間はちょうど緑豆の収穫期に当たり、農民たちは大雨と熟しすぎによる損失を恐れて収穫を急いでいた。配付通知書を手に、農民の代わりに検証と受付を行いに来たウオ市の老村長ウカウ

とした大地が広がっていた。

農民は慈済人を見ると、駆けつけてきてこう報告した。「今年は大豊作でした。一月に大雨が降り、もうダメかと思ったのですが、結果的にその雨は適度に緑豆の田を潤し、豊作になったのです」。

ボランティアが緑豆の畑を見に行くと、莢がたわわに実っていた。笠をかぶった農民が作物を運ぶ様子は、四、五十年前の台湾の農村風景を思い起こさせた。

「緑豆スープで豊作を祝いましょう！」二月二十日、第二陣のボランティアがバゴー地方域に到着し、第一陣との引継ぎ

○ 2018年9月

農業部の職員が慈済に援助を求め、ミャンマー、マレーシア、台湾のボランティアがヤンゴン地方域、バゴー地方域、モン州、カレン州等の被災地を調査、農民は種籾を購入するため政府や企業から借金し、収穫がないと、種籾や肥料を購入するための債務を返済できず、返済できない場合、田圃を没収されることもあることが分かった。

○ 2018年10、11月

水害後、農業再開の時期を逸したため、慈済は緑豆の種を寄付した。植え付け後、翌年の2月か3月には収穫でき、農民の一時的な欠乏を補うことができる。

○ 2019年2月16～25日

ヤンゴン地方域、バゴー地方域、モン州、カレン州の13の村に種籾203,595籠（約4,294トン）を配布する計画を立案、恩恵を受ける農地面積は203,595エーカー（約82,392ヘクタール）、恩恵を受ける農民は47,690世帯。

ボランティアが10日で配布を行い、43,550世帯が受け取り、残りの一割の世帯に対しては現地ボランティアが引き続き配布した。5月末から6月初めの雨季後に植え付けを開始し、145日後に収穫できる。



ミャンマー水害 慈済援助記録

○ 2018年7～8月

連続豪雨により中南部の10以上の行政区域が被害を受け、34万人が被災した。水が引かず、11月に収穫予定だった作物がほぼ全滅した。

ニヤンは、「緑豆一袋は五万チャットで売れます。早く収穫しないと損失が大きくなります」とボランティアに話した。

老村長自身も被災者であり、慈済から緑豆の種を受け取っていた。「慈済からもらった豆の種の栽培成功率は過去と比べずっと高く、収穫比も過去より高いです。以前私は五十籠を収穫していましたが、今回は百二十籠、七十籠も多いんですよ！」

ウカウニヤンは嬉しそうに笑い、「農民に農耕機を提供してくれるなど、政府も進歩しました。慈済が最良の種籾を配

付すると聞き、皆楽しみにしていました。

『翌春の種籾』を残しておいて、今後、毎年良質の種籾を蒔き、豊作が続けば生活も改善します」と言った。

ボランティアはまた、サポートが必要かどうか判断するため、村長と共に種籾を受け取っていない農民を訪問した。ウオ市貴集村の村民ウミョー一家は二畝の田圃を耕すことで、家族六人の暮らしを支えていた。この二畝の田圃は冠水したが、彼は農業部に被災届けを出しておらず、このため慈済の種籾も受け取るこ

「貯米箱」とは？

二〇〇八年、ミャンマーのサイクロン・ナルギス災害後、慈済は救援活動を開始し、次いで種籾を配付して農業の再開を支援した。慈済の「竹筒歲月」の謂れは村民に感銘を与え、農民の烏関寿が毎日米を貯めるようになり、タリン郡区の烏丁屯は農薬を使わない農業を始めた。彼は慈済に感謝し、朝晩米を貯めるようになり、次いで烏善丁が各村で「貯米箱」運動を起こした。

善行はまた台湾に還流し、證嚴法師は全世界の慈済人にミャンマーの

貧しい農民たちの善行に倣うよう呼びかけた。こうして慈済の世界では「腹八分目、二分は人助け」という運動がミャンマーから台湾に還流し、全世界に広がった。（整理・張麗雲）

利息で緑豆の種を買い付け、十四籠を収穫したが、債務と労働者の給与を差し引くと純益は十万チャット（約六千五百円）だと言った。

そのお金は一家のこれから二ヶ月分の生活費であるが、彼は街で期間工として働かなければならない。一日の平均給与

は男性で七千から八千チャット（五百円から五百六十円）である。これがミャンマーの農民の生活の現実であり、貧困から脱することは容易ではない。

ミャンマーの十四の行政区域で、昨年十以上の区域が災害を受けた。慈済基金会は被災状況の深刻だったヤンゴン地方域、バゴー地方域、モン州、ケイン州の五百以上の村で、十日の間に物資の配付を行った。しかしなおボランティアのサポートの届かない数多くの貧困農村があり、現地の人々が愛の心で助け合う必要がある。

善良な風習を発揚

二月二十五日、ボランティアがカイン州フパアンに到着した。ここでは五千世帯以上への物資配付が予定されていた。ここはかつて反軍事政権軍が駐留していたことがあり、民族も複雑な地域である。農業部とボランティアは安全を考慮した後、やはり物資配付に行くことを決定した。

瓦素寺は決して広くはなく、農民たちは窮屈そうに床に座っていたが、少しも不機嫌な様子はなく、にこやかだった。農業部担当者ウウィンナイグウは、挨拶

の中で、「交通の不便なこの地に慈済人は来てくださいました。困難な時期に慈済と出会えたことは幸運です。しかも彼らは配付したら帰るというのではなく、これからもずっと私たちを気遣ってくれるのです」と述べた。

寺院は五百人収容できたが、ボランティアたちは境内の木の下に物資配給地点を設けた。ミャンマー人ボランティア・ソエティンザルウインが農民たちにミャンマー語で慈済と慈済の「竹筒歲月」の謂れ、またミャンマーでの「貯米箱」運動について紹介した。

感銘を受けたウスーウインクヤイン村長はマイクを取ると、「慈済人は仏法をミャンマーにもたらしてくれました。毎食少しの米を寄付すれば人助けできるので」と話した。

ミャンマーの農民は善良且つ温和である。また日頃からお金や米を貯めて出稼者を生養している。投資先を中国からミャンマーに変えた台湾の慈済ボランティアで実業家の郭敏姿は、「毎日米を貯める風習はミャンマーには昔からあります」と言う。老村長ウカウニヤンも、「ミャンマー人は善行や施しを行う

● 配付セレモニー終了後、慈済人がミャンマー語・中国語2ヶ国語版の静思語を農民にプレゼントした。多くの農民が家で毎日読んでいる。



のが好きです。しかし大部分の人は僧侶を供養したり、仏塔の建設に寄付したりすることだけが功德を積むことだと思っています。だからバスで妊婦に出会っても席を譲りませんが、出家者を見るとすぐに譲るのです。今、村民たちは慈済の影響を受け、牛乳瓶に米や千チャット（約六十五円）を貯め、村で困っている

人を助けるようになりました」と話す。

物資配付前、慈済チームは農村で農民の声に耳を傾けた。今回約束どおり配付に來てくれたことに村民は感激し、続々と「貯米」を始めた。慈済が四万七千世帯以上の農民にもたらしたのは豊作の希望だけではなく、「善の効果」だったのである。（慈済月刊六二九期より）



貯米の経済学

文・王慈惟(マレーシア・ペナン慈済ボランティア)
撮影・蕭耀華 訳・惟明

米粒は不思議な無限の力を持っている。種籾を土に埋めれば無数の稲穂に育ち、米を炊いてご飯にすれば、何千万もの人のお腹を満たすことができる。貯まった米は適時に人を助け、良縁を結ぶ。

貯 米に賛同した会員が米櫃を持って里帰りするのは、ミャンマーにおける慈済活動の恒例となっている。持ち寄った米櫃の重さはまちまちだが、農家の人達が生活状況に応じて懸命に貯めたものである。農民達の米を受け取る時、ボランティア達が跪いて謹んで米袋の口

を大きく開け、農民たちにそれを入れてもらった。あちこちから「ザーツ」という音が聞こえた。素早く流れ落ちる米は真珠のように目に映るが、よく見ると、米粒は大小様々であったり、砕けた米粒もあった。

ミャンマーの農家は今でも昔ながらの

小さな竹の容器で計っている。貯米箱から集められた米はこの竹の容器で測って米袋に詰め分けられる。ボランティアは手慣れている。袋詰めが終わるとケア世帯に手渡すが、両手は米粉で真っ白だ。欠けた米粒も完全なものも食糧難の危機に直面した家庭に届けば、一日三食が解決される。

普段から明るく善行好きなミャンマー人は毎日一握りの米を貯めて人助けすることを忘れない。今年の二月、慈済がヤンゴンで一回目の種籾配布活動をした時、ボランティアはその場で貯米箱で集められた大量の米を受け取った。

農民の悲しみは代々続く

今回配付した種籾は、被災地の状況に従って異なった品種を選んでいるが、全てミャンマー農業庁の認証を受けた優良な品種である。即ち、種を蒔いた時から成長過程を追跡し、刈り取り後の処理、選別を含め、農業庁の厳しい審査を通じて何重もの関門をクリアしてから再認証を受けることができるのである。

今回の種籾を雨季に植えれば、来春の穀物が保障され、向こう三年間続けて植えることができる。一般的に農家は窮困しており、毎年の田植え時期になると、



国や金持ちから借金して種を買わなければならぬ。もっと貧しい農家は近所と物々交換したり借りて農耕している。毎年の収入は不安定で、収穫した稲を全部売っても債務を全額返済できない。大半の農家はこのような状況に甘んじ、代々借金しながら農耕している。

「家内が嫁にきた時は嫁入り道具として手首から上腕まで金の装飾品を着けてきました。私が村長になってから、農家が生活のために畑を売りに出すか装飾品を売りに出していると聞きました。家内も装飾品を売り、嫁入りの時に持ってきた装飾品箱が空っぽになりました」と

ヤンゴン省トングワ町リョウニ村の村長が話してくれた。

「農家は借金しても返済できず、我々も彼らの畑を取り上げるのは忍びないのです。ただでさえ満足に食べられない状況下で農耕する畑がなくなったら、子供もいる家族はどうやって生きていくことができるでしょう？」

村長の話しは、ミャンマーの農家の悲しみを語り尽くしている。

クラウドシステムで温く繋がった

今回初めての種の配付活動でラジック

(Radio) クラウド・データベースが採用され、配付対象になる四万七千世帯の農家の資料をデータ化した。前準備の作業はミャンマーの配付活動で最も忙しいものとなったが、村町の農業庁は辺境にあり、場所によっては基本的な電気、水道も行き届いていないため、全て紙に書く手作業に留まっている。慈済は農業庁から農民の名簿を受け取った後、一世帯ずつ配付用データベースに入力した。

データ入力から、校閲、最終確認に至

●「貯米箱の里帰り」はミャンマーにおける慈済活動の一環となっている。子供たちは楽しく列に並び、貯米箱に貯めた米を手助けする米の山に空けた。





るまでの膨大な作業はミャンマー人の慈済青年ボランティア（慈青）が引き受けていた。彼らは配付活動のプロセスを熟知しており、準備作業の中心人物でもある。慈青たちの養成は十年掛かった。助学金を受けていた子供たちはいつもボランティアの後について活動に参加してきたため、今では恒例の活動を取り仕切るまでになった。

配付活動はラジックの効率のお陰で過

●バゴ地区で行われた慈済の種籽配布会場では役人が農民の身分と資格を確認していた。

農業庁は毎年緊急時に備え、種籽を備蓄しているが、去年のように水害が広範囲にわたると、被災した農家の需要に応じ切れなくなる。

程が簡素化され、祝福カードのバーコードをスキャンすれば、農家の資料が直ちに出てくる。農民は受付を終えた後は自分の時間に合わせて、各地の農業庁の倉庫から種籽を受け取ればいいのである。

活動では種籽の受け取り手続きが早くなっただけでなく、何よりも大切なのはボランティアが住民と交流できる時間が確保できたことである。長い間、訪問ケアを行なってきた慈済の郭バオユー師姐^{スージェ}は農民と最も多く交流してきた現地ボランティアと言える。配布後のケアの中で農民からお金がなくて三食にも困り慈済の種籽を米と取り替えるしかない、と



いう話を聞いた時、彼女は心がとても重くなった。

バオユー師姐^{スージェ}は居ても立っても居られず、ある日、彼女は仕事場から慈済ヤングン連絡處にやってきて、この件について私に相談があったので、直ちにマレーシアの葉淑美師姐^{スージェ}に連絡を取った。彼女は十年前のサイクロン・ナルギス風災支援の後、ミャンマーに四年間留まり、黙々と背後から皆を励ましてきた人である。

「必ず、『翌春の種籽を残す』という法師の期待を農民に伝えて下さい。以前、一部の農民が我々から受けとった上質の種籽を質の悪い米に換えたことがあります

すが、却って損をします。村長がそういう行為を耳にしたら、必ず私達に知らせよう、村長に協力を求めて下さい」という葉師姐スーシェの切実な呼び掛けが遠くから入ってきた。

電話を切ってから、私とバオユー師姐スーシェは互いに見つめ合い、心の中で、今はスタッフ総出で配付活動をしているが、如何にして素早く農民達の実状を把握できるかを考えた。村長に約束を取りつけ、ヤンゴンから最も近いトウバク町に向い、農民が種籾を受け取ってからの実状を把握することにした。

私たちは手ぶらで行ったわけではな

種籾も日々の食事も大切

ヤンゴンからトウバクまで車で約二時間かかる。トラックは混み合う市内を通り抜け、次第に狭い田舎道に入った。朝日の射す中、田園一面に薄い霧がかかっていた。豆畑の中では、豆を収穫していた農夫たちが編笠をかぶり、色とりどりの服を身につけ、心踊るような光景を作り出していた。

●慈済ボランティアはスマホで農家の人達が受けとった祝福カードをスキャンし、資料をクラウドに保存した。これで農民は支援物資受け取りの手続きが完了し、後日そのカードで近くの農業関係の役所から種籾を受け取ることができる。

かった。先の配付活動で既に七百キロの貯米が集まり、ヤンゴン連絡處に運ばれていた。そこで直ちに會て米屋を経営していた羅達明師兄スーシェンに頼んで米の袋詰めをしてもらった。彼は竹の容器と秤を使って手慣れた様子で米袋から一枀ずつ白い米を掬い出した。バオユー師姐スーシェは計算し、過去の経験から一世帯一ヶ月に必要な米の量を大体三十枀（約六十キロ）になると推測した。

車を予約しようとした時、運転手は我々が三百キロもの米を運ぶと聞いただけで、金儲けを諦め、予約を断った。結局、トラック一台を予約し、翌日早朝に出発した。





トングワに着くと一人の農婦がトラックに飛び乗ってきた。まるでお出掛けでもするかのように、両頬にタナカ(Thanaka : タナカの木から作られた粉)を厚く塗り、綿の生地でできた花柄の帽子をかぶり、スパンコールがいつぱいついた紫色の伝統衣装を着ていた。

農婦は車に乗ると直ぐにバオユー^{スージェ}師姐と延々と喋り出し、彼女が始終合掌して感謝していたのが目に入った。そして暫くして師姐^{スージェ}は私の方を見て説明した、「こちらは農村の訪問に同行する為に村長が推薦してくれた村人です。彼女はとっても熱心な方で村の老人や子供に助けが必

要な時は必ず手を差し伸べています。彼女は以前緑豆種の配付活動に参加したことがあり、今回も種籾を受け取ったそうです。彼女はとても慈済が好きで、ボランティアになりたいと言っています」。

今日の目的地はワニ池村で、四十九世帯が去年慈済から緑豆の種を受けとっており、今ちょうど収穫期である。そして、二、三日前に慈済から種籾を受けとったばかりで、皆、とても喜んでいいる。慈済ボランティアが来たと訊いて、集まってきたのである。

私たちが村の入り口にたどり着くと、何人かの村人がバイクに乗って出迎えに



●貯米箱の里帰り会場では子供たちが一杯になった貯米箱を抱え、嬉しそうに列に並び、縁の有る人に愛の心を捧げるのを待っていた。

来てくれるのが見えた。皆、慣れた様子でバイクの後部座席に座って出発した。村に入る道は意外と快適で、コンクリートで整備されていた。また、村中の建物には政府が支給したソーラー・パネルが取り付けられていた。我々がよく訪れるタイクイ村付近の貯米をしている村々に比べて、インフラ整備がかなり整っている方だ。

バイクは一軒の農家の前で止まった。その庭先の瓜棚には大きな瓢箪ができていた。屋内の女の子が客人の来訪を知ると、素早くゴザを持って来て敷いた。それはミャンマーのもてなしである。

屋外で十七、八歳くらいの綺麗な少女が水鉢の側でコップを洗っていたが、その後、湯呑みと急須をテーブルまで持ってきて来た。その聞き分けの良い仕草に好感が持たれ、人々に深い印象を与えた。

座って間も無く、農民たちが徒歩やバ

●月一回行われた貯米の寄付活動が終わると、地元の農民は集められた米を米袋に詰め替えを手伝い、ケア世帯に届ける準備をした。

イクなどで続々と集まり、人が多くなってきたので、村長が向いの寺の住職から場所を借りて集会しようと提案した。

寺に入って法師に礼拝した後、椅子が整然と並べられた小ホールに案内された。多くの農民は緑豆の収穫で長時間、農作業するため、皮膚は真っ黒に日焼けしていたが、皆、元気に笑顔を浮かべて席に着いた。

バオユー師姐スーシエが今回の収穫はと聞くと、皆、「とっても良いです」と嬉しそうに言った。

「去年九月に慈済人が調査にきた後、花蓮に戻って證嚴法師に報告しました。



緑豆を配付して、この期間中に経済的に支援できる作物からできれば、来季の種籾を買うことができると法師が言いました。私たちの法師は皆さんのことを非常によく分かっていると思いませんか？」とバオユー師姐スーシエが問いかけると、

「法師様は我々のことを思っ下さっている」と居合わせた三十人余りの農民が異口同音に答えた。

「収穫したら、来季用の種籾を買えますか」とバオユー師姐スーシエが聞くと、農民は全員笑い出した。その背後には様々な答えがあり、ミャンマー人の楽観的な性格を表した。多くの農民は緑豆を売ったお

金で借金の利息を返済にするが、来季の種籾はまた借金するしかないのである。

「法師は再度、私たちを種籾の配付によこしたのですが、皆さんの困難をよく分かっておいでだと思いませんか」とバオユー師姐スージェが笑い声の中で軽く訊いた。皆、頷いた。

師姐スージェはゆっくり見渡して言った、「今回、配付される種で雨季に田植えもできませんし、どんな農地も荒廃させないことを法師は望んでいます。私たちが住む地球上にはまだ、食糧がなくて飢えている人が沢山います。食糧不足の問題を少しでも解決する為に、皆さんは努力して耕

作してくれませんか？法師のお気持ちを分かってください」。

「我々はいくら辛くても、法師様からいただいた種を売ったり、碾いて食べたりしません」と誰かが感激しながら椅子の上に立ち上がって叫んだ。

「しかし、食事もある現実的な問題ですよ」と師姐スージェが心配して聞いた。

皆、下を向いて黙り込んだので、師姐スージェは村長に聞いた、「村長さん、もし村人が食糧不足になった時は、必ず連絡して下さい！ここに居る人たちは大丈夫ですか」。

村長は直ぐにこの中で、毎日借金して米を買っている二人を指さした。師姐スージェは

根気よく皆に慈済の支援方式を説明した上で、持ってきた米をその二世帯に送ると同時に、親族や隣同士が助け合うようお願いした。

一粒の米には計り知れない不思議な力が隠されている。土に植えれば無数の稲穂に実り、炊けばご飯になって何千万世帯のお腹を満たすことができ、籠いっぱいになって適時に人助けして良縁を結ぶことができるのである。（慈済月刊六二九期より）

●米粒も貯まれば籠一杯になり、人助けの力となる。貯米で恩恵を受けた世帯は緊急の食糧を受け取ると、楽しくボランティアたちと記念写真を撮った。



困窮の背後に広がる 無限の希望

数百人の農民が冷房のない配付会場で、心穏やかに微笑んだ。ボランティアが一列に並んで物資をリレー式に運んでいるのを見て、彼らも自発的に加わった。彼らは単純な道理を理解している。逆に、毎日注意を受けている私の方が忘れがちだ。

文・張煥奇
撮影・蕭耀華 訳・心嬋

●緑豆の種を受け取った農民は、遠い国から訪ねて来た慈済ボランティアと緑豆のさやが実った緑豆畑の中で喜び合った。





種

籾の配付は午前中に終わり、空いた午後の時間を利用して私たちは七十三歳の農民を訪問した。彼には五人の子どもがいて、上の三人は既にタイへ出稼ぎにいき、下の二人は家に残って家事手伝いや臨時工をしていた。

数年前、タイにいる子どもたちから仕送りがあり、家に井戸が掘られた。しかし、子どもが結婚してからは仕送りがなくなっただけでなく、孫を連れてきて年配の親に面倒を見させているのだ。家には雇がなく、仕送りで付けようと思っていたが、その期待は泡と消えた。今、老農夫はひたすら蒔いた種籾が豊作をもた

らすことに期待を寄せている。

貧困であっても、ミャンマー人はいつも果てしない希望を持っている。楽天的で自分の運命を受け入れているのは生まれ持った幸福な性質である。私たちには彼らのような楽天性が欠如しており、裕福な生活の中で、本当に足るを知っているのだろうか。

物質的に豊かな台湾では、食べすぎが心配である。「腹八分、二分は人の助け」というスローガンの実行は決して難しくはないはずだ。ミャンマーでは痩せ細った農民がお腹いっぱい食事するのは難しく、彼らにとって一握りの米は大切なエ

ネルギー源であるが、彼らは捨てがたきを捨てる精神でいて、他人を助けるために一日一握りの米を「貯米箱」に入れている。

マレーシアの師兄が持っているスマホのおかげで、ミャンマーはライブで花蓮静思精舎での説法を聞くことができるのである。スクリーンは小さく、音量も大きくはないが、心して聞けば、はっきり聞き取ることができる。ミャンマーと台湾の間には一時間半の時差があり、早朝三時五十分から私たち四、五人はそのスマホの前に集まって説法を聞いている。ある日、證嚴法師は、「衆生が常に平等な慈愛の心を持っていれば、安らぎを感

じて煩惱はなくなり、人は助け合いながら生きていくことができます」と開示した。その時、私は配付活動での出来事を思いだした。

その日、午前中の配付活動は非常にスムーズに行われ、珍しく早めに終了することができた。午後は二手に分かれ、一組は家庭訪問を行い、もう一組は会場の後片付けをした。ところが予想外の出来事が起き、村長が百人余りの村民を連れて種籾を受け取りに来たのである。彼らは午前中、農作業に忙しかつたのだ。

その時、村民の資料が家庭訪問チームの車にあることに気づき、直ちに電話し



てUターンしてもらった。ところが三時間以上も待って、ようやく彼らは慌ただしく戻ってきた。田舎の道に迷ったのだった。

暑い午後、村民たちも三時間以上待った。会場には音楽もマイクもなく、おまけに言葉が通じず、コミュニケーションを取るのが難しかった。彼らがいらいらしていかと心配し、皆で歌を歌い始めた。感謝の歌から歓迎の歌まで歌い、やっと会場は楽しい雰囲気包まれた。活動を終えたのは夕暮れで、レストランに戻ったのは七時半だった。田舎道に迷ったボランティアをからかって笑い声

が広がり、空腹を忘れていた。

人との関係で平等な大愛の中に身を置けば、煩惱から遠ざかることができる。ボランティアたちは見返りを求めず、ただ村民たちの苦しみを和らげ喜びをもたらしたい一心で、ミャンマーに奉仕にやってきたのである。善良な村民は来季の豊作を期待して、種籾を受け取るために長時間待っていたが、誰も文句を言わなかった。私たちはお互いに感謝の言葉を交わし、互いに心の安らぎを与えた。

七日間の滞在で見聞したことを思い出してみると、村民たちは「安貧楽道」と形容することができる。人々は多くを求

めることなく、無事に暮らせることだけを願っているため、「安」であり、民生用のインフラ整備が遅れているため、「貧」と言える。一文無しであっても、家族と一緒に暮らせることが「楽」であり、物質的に裕福でなくても、彼らの心は影響されることなく、逆に天と地を畏敬し、信仰心が厚く、道理をしつかりと理解している。

今回の配付活動を通して、人はこれほ

●炎天下で農民は腰を曲げて、苦勞して育てた稲を刈り取っていた。ミャンマーは世界の米どころの一つであるが、様々な状況下、米の栽培と収穫は人力に頼るしかなく、それは人々が苦勞して収穫したものである。





どもにも簡素な生活ができるのだと気づかされた。ボランティアの話によると、ミャンマーでは荷物を無くす心配はなく、外出時に戸締りも必要ない。多くの人の家には扉もないが、もとより盗まれるものはないのだ。仏教を信じているため、元から彼らは善良な本性を持ち、安らかな心で何も求めず、求めないからこそ心が満ち足りているのである。

「道」とは、道理を弁えていることであり、文明人だと自負する私はミャンマー人よりも道理を弁えているとは限らない。配付会場で、何百人もの村民が冷房のないお寺の中で、騒ぐことなく微笑み

を浮かべて物静かに和気藹々としてボランティアの指示に従っていた。

物資を運ぶために、ボランティアが一列に並んでリレーしているのを見て、彼らは自発的に列に加わって手伝ってくれた。おかげで作業はすぐに終わった。これが「合和互協」という道理であり、彼らはよく理解している。逆に、毎日注意されている私は物忘れがひどい。要するに、私はミャンマーで「安貧樂道」を学び、「仏七」（注）に参加したとも言える。

（注）仏七：お寺で七日間の法会に参加する活動。

（慈濟月刊六二九期より）

親と子と教師、三者の本音

◎文・李秋月（慈濟教師懇親会ボランティア） 絵・鍾庭嘉 訳・本諱

子供に友達がいないことが心配

問

私の子供は学校での友達付き合いが苦手なのですが、私が手を差し伸べてもいいのでしょうか。

答：子供に友達がいないと、親としては焦ったり、手を差し伸べて手助けをしたいと思うのは当然ですが、絶対にしてはいけないことです。子供同士の単純な関係が、親の介入によって複雑になっ

しまい、ますます人間関係が悪くなっ

て、場合によっては逆戻りしてしまいます。

それではどうしたら子供の人間関係を挫折から立ち直させることができるのでしょうか。次のような幾つかの方法が考えられます。

一、子供と一緒に状況を整理する

子供にどんな状況で一緒に遊んでくれる人が居なくなったのかを聞きましよう。グループ分けのとき、一緒になつてくれる人がいないのか、放課後一緒に遊んでくれる人が居ないのか、それとも友達になることを妨げる人がいるのかです。そして子供が話している時は、急いで解決するために何か方法を教えようとしてはいけません。まず子供の話に耳を傾けてから、反問するのです。「これからどうするつもり？」という言い方で聞いてみましょう。子供は話している間に

解決の方法を見つけるかもしれません。

二、子供を支持し、思いやる

子供が心の中の苦痛を言えたのは、今まで内心で戦ってきたからできたことです。こんなときに小さい子供だと抱いてあげるといいですね。大きい子供だと肩を叩き、「父さんと母さんは何があつても一緒に向き合っていくから心配しないで」という気持ちを伝えましょう。

決して古い話などを繰り返さないことです：「その子と遊んではいけないと言つたのに、全然話を聞いてくれないから」

とか「誕生日にケーキをクラスに持って行こうかと言つたのに要らないというからこんなことになったのでしょうか？」などと言つてはいけません。このようなことで問題を処理すると子供は自ずと「口を閉じて」しまいます。そして問題が起こつても二度と教えてくれなくなります。では、どうしたら子供に寄り添い、健康に育てることができるのでしょうか。

で、解決しにくい問題です。下記のように分けられます：

言葉によるいじめ：嫌なあだ名を付けられる。言葉で傷つけられたり、からかわれたり、脅されたりするなど。

友人関係のいじめ：弱い者いじめをされる。うわさを流され中傷される。

性的いじめ：体や性別に関するからかい、性的嫌がらせを受けるまたは批判される。または性的に体を傷付けられる。

物理的ないじめ：一方的に相手を蹴ったり、殴ったりすること、また物を奪ったりするなど。

三、子供に寄り添い、

いじめに面と立ち向かう

いじめは人間関係において最も困難

SNSでのいじめ：電話のテキスト

言っていけないことは言わない

たとえ自分の娘でも言葉と時を選ぶべきである。
言いたいことを我慢するのは困難なことだが、
言ってはならない時には言わずに我慢する方が良い

娘は初産で母となり、私も初めてお
婆さんになりました。娘が産婦人科を

退院して産後ケアセンターに移った日、
赤ちゃんの黄疸が安全指数を超してし
まいました。センターは

これ以上悪化すると責任
は負えないと言うので、

娘は二日間自分一人で赤
ちゃんを抱いて病院に通
いました。

その日は、夜の十時を過
ぎても婿が帰宅しなかった
ので、娘はタクシーで余
り遠くはない病院に、赤
子を抱いて黄疸の照射に
行きました。私はお産が
済んだばかりの娘が哀れ
で、つい口をついて出てし
まいました。「お産が済ん
だら私が世話をするから
実家に帰るように言った



でしょう。それに病院は実家の方が近いから何かあってもすぐ行けるのになぜ言うことを聞かないの」。話し終わらないうちに、娘は泣き出して「どうして私を責めるの。赤ちゃんの黄疸はとても大切なことよ」と訴えました。その時私は自分が間違ったことを言ったのだととても後悔しました。

私は娘が大事で、娘は赤ちゃんが大切、二人とも間違っただけじゃなかったのです。ただ当初娘と婿が私に苦勞をかけまいと思いつて産後ケアセンターを選んだのに、私は娘たちの心をくんで上げられなかったのです。

です」と教えられました。

その一瞬、私は何かに押しつぶされたように心が痛みました。そうだ、言っただけじゃなかったのです。すべてのことは熟考を重ねなくてはいけないのです。口による業を慎むのはなんと困難なことでしょう。たとえ腹を痛めた我が子でも、言っただけじゃいけないことがあるのです。

法師は毎回諭されるお話しの後には「細心の注意をはらうように」と言葉が結ばれます。それは日常生活において「何事につけても理に叶うように」するのが肝心ということではないかと思うのです。

證嚴法師は朝の説法『法華經』の中の「分別功德品」で「事に触れ理を解する」ことを説いておられました。法はこのように教えています。私たちはそれをどんな方法をもつて、人として世の中の事に当たればいいのでしょうか？如何にすればこの道理に当てはまるのでしょうか？

翌日法師の説法の中で「華、香、瓔珞」の中で、華は善心、香即ち善徳、瓔珞妙嚴即ち忍辱衣、とそこまで説くと少し話題を変えて「多くの事は適切でない時に言うべきではなく、言っただけじゃありません。我慢するのです、とにかく用心すること

耐え忍ぶのも孝行のうち

私は毎週、台中慈濟病院付属養護老人ホームへ姑の面会に行きます。ある時このボランティアが私に「あなたはあのお婆さんの娘さんですか？」と聞きました。「いいえ嫁です」と答えると「本当に親孝行なこと」と感心するのです。私は「これは嫁として当たり前のことです」と答えました。こういう会話がよくありました。そして、暫く後、私は花蓮精舎の朝会の書類を整理していた時、ある病院ボランティアがこう話していました。毎朝七時になるとやってくる中年の

婦人のことです。その婦人は寝たきりのおばあさんに朝ご飯を食べさせているそうです。そこではスタッフに任せてよいのでなぜだろうと不思議に思い、お婆さんの娘さんかどうか確かめると、実はお嫁さんだったのです。

ボランティアが「今時、こんな姑孝行の嫁さんは珍しいですね」と褒めると「私は嫁いだ日から、何をしても良く言われたことがなく叱られてばかりでした」と言いました。少し気に触っていたような口調だったので、ボランティアは「そんな姑さんなのになぜ毎日世話に来ているのですか？」と尋ねると「仕方がないの

です。兄弟は誰一人世話をしませんから」と答えました。そして、気が収まり「世話をしているのが習慣になって、一日でも姑の顔を見ないと落ち着かないのです」と付け加えました。

「孝行をしているのですから、不満を言わないようにしましょう。言っても仕方がないでしょう、お姑さんはそういう人なのですから」とボランティアが言うと、諦めたように「隣の人たちからも気にしないことだと諭されますが、毎日そう言われるとかえって気分が悪くなってしまうのです」と続けました。

この時ボランティアは「もしも廻光返

照（死ぬ直前に過去のことが走馬灯のように頭の中に現れること）という現象が本当にあるのなら、お婆さんはあなたの手をとって『有難う、貴女に幸せがあるように』といいますよ」と言葉をかけました。するとお嫁さんは泣き出してしまいました。

ボランティアは間違ったことを言ったのではないかと驚きました。理由を聞くと今までお姑さんの不満を言う度にみんなが「そんなこと言わず、我慢しなさい」とおざなりなことを言うだけで、誰も彼女の立場を考えてくれていないような気がしていたそうです。しかし今のボラン

ティアの言葉に、彼女は心にわだかまっていたものが解き放たれたように頭を上げ、微笑んで「有難う」と言いました。

私は書類を整理しながら聞いていましたが、涙で文字がかすんでしまいました。私はこの人と同じ境遇でしたし、今もしも一週間姑に会いに行かず晩御飯の世話や仏のお参りに連れて行かなかったら、その一週間は何かやり残したような気がして仕方がないのです。でもそれは心からの親孝行ではなかったと分かりました。姑の健康な時に姑の無明に対して恨みを吞み込んで孝行することはできませんでした。記憶喪失の今になってか

ら孝行を尽くしても孝行と言えるだろうか？この人に比べると私のしていることは劣っている様に思えて反省したのです。

自覚を促すサルスベリの樹

早期、中高年の委員たちが法師を母親のように思って、家庭内の些細なことを訴えていました。法師はそれを「嫁の嫁に、子供たちの子供になりなさい」と戒められておられました。

忍辱は修行の中でも困難な行いです。突然思いのままにならない場面にあると、理知は一秒で忽ち覆されてわけのわ

からない無明に攪乱され、瞬く間に努力した甲斐がなくなってしまう。これは家庭内の親子関係でよく発生することです。

時代の変化に伴って親子の考え方には大きな違いが生まれています。私たち親がよく言う「過去の苦勞」は、今の子供たちに通用するとは限りません。これは親として一度深く考える必要があることなのです。

数日前に精舎へ帰った時、ボランティア朝会の合間に散歩していると、大きな石の上に一本の木が生えており、その下には、複雑に絡み合った根が目につきま

した。顔を上げ、「これが精舎の尼僧が話していた、サルスベリの樹に違いない」と思いました。

徳念尼僧は当初、大きな石に小さな木が付いているのをそのままにして精舎に運び込みました。その後、枝が伸び、葉が散っては芽を出し、いつしか人々がその木陰で休めるまでに成長したと聞いていましたが、それがこのサルスベリでした。

人と人の間では、常に人事じんじの纏わりから抜けきることができず、酷いときになると親族間でも関係の破綻をきたすことがあります。纏わり付いている木の根は、

無明が自分を縛り付けているように見えて私たちの一生を表しているようにでした。よく見ると根はそこから抜け出して枝葉をつけた後、葉を広げて成長し、自由開豁に伸びていく糧となっているようでした。私たちに一事を経ると、一つの智慧が付くということを示しているようではありませんか？

「骨身を刺す寒さを超さなければ、鼻をつく梅花の香は得られない」と言われます。逆境は増上縁であり、また私たちの道業の糧になり、「事に当たっては理に叶っているか」と鑑みることが大切なのです。（慈濟月刊六二六期より）

前科を改め清らかな人生を送る

酒を飲むと妻子に暴力を振るっていた。麻薬を買うため母親の形見の金を使い込んだ。自らの人生に行きづまっていた劉邦洲は、慈済ボランティアが差し伸べた手をつかんだ。

正しい道に戻るには実に困難が多いが、ただ一つの願いを胸に、努力している。母親に恩返しをして、家庭を壊したことを償いたいのだ。

「スー 師」

姑^グ（年配の女性慈済委員の尊称）、自分はこの役柄を演じると感情が抑えきれないので、これ以上はできません」。環境保全ボランティアの劉邦

洲は手話ミュージカル「父母恩重難報經」に参加していた。彼が演じる役柄には親に対するあらゆる反抗的な行為をする場面があり、それは自分がかつて母親にし

たことを思い起こさせたのである。彼は高ぶる感情を抑制することができず、リハール中懺悔の涙が止まらなかった。

二〇一五年、劉邦洲の母親は病気を患い入院していた。ある日の夕方母親を見舞いに行った時、彼は麻薬への欲望が抑えられず、ついベッドの横のテーブルに置かれた母親の財布に手を出してしまった。その日の夜十時過ぎ、妻から母が亡くなったとの連絡が電話であった。

彼は思わずベッドから飛び上がった。

●劉邦洲は仕事後、慈済リサイクルステーションに来て回収物の分別整理をした。行動で以て子供たちが持っていた父親のイメージを立て直せることを願った。（撮影・施龍文）



頭の中が真っ白になり、思考が停止した。すると突然、頭の中で自分を責める声が鮮明に聞こえてきた。「自分は母さんの形見の金を盗んで麻薬を買った。何と許したい親不孝なことをしてしまったんだろう！」。

子どもから恐れられ疎まれる

劉邦洲は嘉義県東勢地方に生まれた。小さい頃に両親が別居し、末っ子の劉邦洲ら兄弟三人は高雄でセメント業を営む父親が引き取った。二人目の兄は病

弱だったため東勢に住む母親の元へ送り返された。

父親の友人はほとんどがヤクザのような仲間で、兄弟は自ずとその悪癖が身に染みついてしまった。「九歳の時に警察に輔導されたことがありました」。劉邦洲は警察署や少年鑑別所への出入りを繰り返していた。

進学しなかったためどんな仕事をしたらしいのか分からず、また、父親も失業したので、親子は故郷の東勢に戻った。劉邦洲は祖父の運搬業の仕事を手伝った。トラックに乗って梨山や卓蘭地方と東

勢を行き来し、季節の果物や野菜を台湾各地に向けて運んでいたのである。二十

歳の時に、当時会社で経理をしていた同僚と結婚し、息子と双子の娘をもうけた。

劉邦洲は酒を飲むとしばしば妻や子どもたちに暴力をふるう悪癖があり、さらには薬物にも手を出してしまった。母親の説得もむなしく、妻を深く傷つけた上、子どもたちも父親に対して恐れと憎しみの気持ちを抱かせてしまったので、ついに妻は劉邦洲が家族に近づくことができないように、家庭内暴力保護命令の申し立てをした。

「あの、大丈夫ですか」

二〇一六年の中秋節の前日、台中慈濟病院ボランティアの黄明月は普段通りに患者に挨拶したり、ボランティアに声をかけたりしていた。その時不意に髪が肩までのび瘦せた若い男性を見かけた。彼は今にも失神しそうな様子で、ふらふらと院内のホールをゆつくりと移動していた。黄明月は本能的に、「この青年は助けを必要としている」と思った。

数日後、ボランティア事務室に座っていた黄明月は、病院の廊下で、先日見

かけた青年らしい後ろ姿に目をとめた。青年は、タバコと透明のペットボトルを持っていた。長年ケアの経験を積んできた黄明月は、ペットボトルの中身が水ではないとすぐ判断した。青年はタバコを一本、二本と吸い続けた。彼が三本目に火をつけたその時、黄明月は「今だ!」とテーブルに置かれた梨を手にとって、青年のもとへ向かった。

「あの、大丈夫ですか？」青年は黄明月をちらつと見てタバコを吸い続けた。

●2017年1月、ボランティア黄明月（写真右）は劉邦洲（写真左）に、「勇敢に自分の過ちに立ち向かって、清らかな人生を取り戻すように」と励ました。



「病院に來たのですから体に問題を抱えているのでしょうか。いま手に持っている二つのものは貴方にとって良くないのは確かです」。青年は相変わらず無表情で、何の反応もなかった。

黄明月は続けた、「あなたは体の調子もよくないのでしょうか、ひよっとしたら経済的な問題もあるのではないですか。あるいは家族に無視されているのでは...?」すると、青年は「どうして分かるんですか」と目を大きくして言った。

彼の反応は予想通りだった。黄明月はこの機会を逃さず、「この梨と貴方のタ

バコとボトルを交換しませんか」。彼は梨に目をやると、優しい眼差しになった。

「梨なら自分の実家がある東勢の名産ですよ。自分は以前トラックで梨をたくさん各地に出荷していたんです」。

「そうですか。では、代わりにパイナップルケーキと交換しましょうね!」。黄明月はボランティア事務室に戻って、パイナップルケーキの箱を持ってきて、青年の手からタバコとボトルをうまく取りあげた。

この青年が劉邦洲である。アルコール依存症が原因で膝臓炎を患い、手術をし

なければならなかったが、一人で通院していた。手術のスケジュールは決まっていたのだが、「お金はどうすればいいのか？誰が自分を看病してくれるのか…」とずっと悩んでいたのだった。

彼が行き詰まっているのを見かねた黄明月は、入院中も毎日のようにお粥を病室に持つて行つた。退院後も台中慈済病院に近い新田リサイクルステーションのボランティア呂明煌に連絡を取り、傷口が全癒するまでサポートを要請した。さらに、かつて多くの改心した前科者に関わってきた蔡天勝にも、「劉邦洲に寄り

添って、新しい人生の方向へ導いてやってください」と依頼した。

途方に暮れた劉邦洲にとって、黄明月との出会いは、まさに道を照らしてくれた灯火のようなものだった。彼はこの縁を大切に離さないと決心した。また、蔡天勝と呂明煌も父や兄のように接してくれ、家族のような温かみを感じていた。こうして劉邦洲は、毎日バイクでリサイクルステーションへ行き、ボランティアとともにリサイクル活動に参加するようになった。午後は慈済病院の静思書軒で静思語を書き写し、かつてなかったような静け

さと安心感を心に感じる事ができた。

しかし、このように東勢と潭子の慈済病院の間を毎日バイクで往復する生活を長く続けるのも良策とは言えなかった。そして、劉邦洲が以前の生活と縁を切ることを決心したので、黄明月と呂明煌は、「自分が過去に犯した罪に勇敢に向き合い、安心して刑に服しましょう。そして将来刑期を終えて出所したら、清らかな人生を取り戻せますよ」と劉邦洲を励ました。

二〇一七年二月、黄明月と呂明煌は台中の刑務所まで劉邦洲に同行し届け出を

した。手錠を掛けられて鉄格子に入ろうとした際に、「中では、何があっても屈せず、じっと我慢して下さいね」「懺悔のため刑に服しましょう。刑期を終えて、改心して、清らかな身と心で社会へ帰ってきてほしいのです」と母のように温かく話す黄明月の言葉は、劉邦洲の心に深く刻まれた。劉邦洲は、振り返って鉄格子の外の黄明月と呂明煌に、「師姑、師伯^ボ（年配の男性慈済委員の尊称）、一七カ月後に会いに行きます」。「はい。待っていますよ！」と黄明月ははつきりと答え、約束した。

リサイクルステーションで心を癒す

劉邦洲は、ほぼ毎週のように刑務所から黄明月と呂明煌に宛てて手紙を書いた。自分の心境をつづるほか、妻や子どもたちの近況を知らせて欲しいとボランティアに伝えた。

劉邦洲が安心して刑に服することができよう、また、妻と子をいたわるために、黄明月は東勢の劉邦洲の実家を訪ねた。二回、三回と訪問を重ねるうち三人の子どもも懐いてきて、黄明月のことを「おばあちゃん」と呼ぶようになった。妻も病院へ来る度に、ボラン

ティア事務室に寄るようになった。

「お子さんと一緒にリサイクルステーションに来てください」と黄明月は親しくなった一家を誘った。それから、毎週の土曜日に妻は三人の子どもを連れて東勢区から新田リサイクルステーションに来るようになった。子どもたちは楽しそうに遊び、妻は回収物の分別整理をしながら、ボランティアと楽しくおしゃべりをした。

「あなたたちのお父さんは、環境保全に尽くして人柄も改まりました」。四年生と六年生の子どもは、ステーションのスーグイ師姑、スーボイ師伯から自分の父親のことをその

ように聞いても、暴力を振るう昔の父親の印象は拭いきれなかった。

劉邦洲がどれほど家族を傷つけていたか、黄明月と呂明煌はよく分かっている。劉邦洲は、妻に許してもらい、子どもたちを抱きしめたいと願っているが、一度心に受けた傷は、時間をかけて癒さなければならないのだ。

刑務所を出てまっしぐら

二〇一八年六月六日、黄明月は通常通りに患者や付き添いの家族たちを見て、支援が必要かどうかを考えながら、廊

下を歩いていた。

突然、携帯電話が鳴った。電話に出ると、「ボランティア事務室に劉邦洲という青年が来ています」との知らせだった。「あら！劉邦洲はまだ刑務所にいるはずなのに？」不審に思ってからと不安を感じた。事務室に戻ってみると、目の前に立っているこの人が誰なのかさっぱり分からない。髪を短く刈り、旅行鞆を両手に持ち、生き生きとした目で微笑んでいる。一年四カ月ぶりに見た劉邦洲は、以前とはまったく違って、しっかりした自信を持っているように見えた。

「仮釈放が早くなったと今朝知りました。師姑^{スィグ}に知らせるより直接会いに来る方が早いと思ったのです」と劉邦洲は興奮した様子で黄明月に報告した。「そうだったのですか。住む所はあるのですか？これからの生活はどうするのですか？」。質問が次々と黄明月の頭の中をめぐる。

黄明月の知らせで駆けつけてきた呂明煌が、劉邦洲とリサイクルステーションの部屋で一夜を過ごした。二人は久しぶりに再会した家族のように話が弾み、呂明煌は劉邦洲の過去についてより深く理解した。これから正道に歩みだそ

うとする劉邦洲に、呂明煌は手を差し伸べることを決心した。

ボランティアの傅美珠は劉邦洲の状況を知り、無償で部屋を提供した。住居の問題は解決したものの、どのように生活していくか。刑に服する前のように毎日リサイクルステーションにいるわけにもいかない。

呂明煌が金物工場を営んでいるボランティア頼明徳に話すと、「改心した人にチャンスを与えることはとても大切だ」と言って、劉邦洲を従業員として迎えた。

工場は蒸し暑く、体が慣れない時期も

あったが、蔡天勝から「頑張ろう！初めての給料日にはご馳走しますよ」と励まされた。

月曜日から金曜日までは工場で働き、土曜日の午前中を環境ボランティアに当てた。残った時間は調理ボランティアをしたり、読書会に参加したりした。何か活動に誘われると、時間の許すかぎり参加した。回数を重ねるにつれて、慈済とともに新しい道を歩もうと、彼の決意は固まった。

●多くの更生者をサポートしたボランティア蔡天勝（写真中）が読書会で劉邦洲（写真左）に付き添って、さまよう心を安定させた。



受け入れてくれる

三人の子どもはリサイクルステーションで彼らの父親の姿を見かけてもなかなか近寄れなかった。劉邦洲が刑務所から釈放される前に離婚した妻は、まだ過去の葛藤に苦しんでおり、元の夫を見ることがすらしたくなかった。呂明煌は「気にしないで、実際の行動であなたの誠意を示しなさい。子どもと前妻があなたを理解して許してくれるかどうかは、縁の成り行きに任せましょう」と励ました。

時間が経つにつれて、ある日、長男は父親がくれるお茶を受け取るようになって

を思い起こさせた。ステージでリハーサルをする度に、彼は泣き出してついに辞退しようと思った。

スタッフは諦めず、がんばって役を演じるよう劉邦洲を励ました。彼にはまだ劇に出る勇気がなかった。丁度給料日になり、約束の食事をごちそうしようと蔡天助がやって来た。劇の事を相談すると「それは出た方がいい。僕が付き添いますから」と言った。劉邦洲は背中を押してもらった気がした。

二〇一八年八月十八日の公演の日、二●「父母恩重難報経」の手話ミュージカルで「反抗する子」を演じる劉邦洲（写真右1番）が、昔の自分を描いたようなその役を演じ、懺悔した。

た。子どもが徐々に彼を受け入れるようになったことを知って、劉邦洲はとても嬉しかった。今では三人の子どもがよく彼にもたれかかって、一緒に遊ぶようになった。

その日、劉邦洲が台中の静思堂へ調理ボランティアに行く途中、「父母恩重難報経」の手話ミュージカルに参加しないかとボランティアに誘われた。活動の内容も知らず、ただ「慈悲の活動だから参加すべきだ」と思って承諾した。だが、彼に与えられたのは「反抗する子」という役で、両親に対するあらゆる反抗的な内容は以前自分が母親に対してしたこと



階の舞台の袖で出番を待っていた劉邦洲は、緊張のあまり感情をうまくコントロールできずにいた。やがて時間となり舞台上上がった。プロの俳優に導かれ、全体の雰囲気呑み込まれてしまった。病気の母親の様子が心に思い出されて、悔やまれ、いつのまにか涙で濡れていた。どうやって演技を終えたのか自分でも覚えていない。舞台を降りた後、彼はすぐにトイレに駆け込み、顔を覆って泣きくずれた。

二日連続で六回の公演があり、その度に劉邦洲は涙が止まらなかった。「母親の形見の金を勝手に取って麻薬を買い、

家族の心を傷つけた。自分はとんでもない親不幸者だ」

劉邦洲の前妻は、彼が以前犯した大きな過ちをまだ許すことができなかったが、二日間の出演中、彼女は行動で彼をサポートして、父親の変化を見せようと思ひ、子供達を静思堂に連れて行った。劉邦洲にとってこれほど心強い応援はなかった。「父親の代わり様を見せることで、父親が本当に改心して慈済の正道を歩んでいるのだと知って欲しかったのです」。

その後、地域の親子成長クラスと慈済少年クラスが始まる日、家で休むつもりだった劉邦洲も台中慈済病院の人文広場

に来て、ボランティアと一緒にテーブルと椅子を並べたり、お茶を準備したりした。ボランティアのユニフォームを着た彼は、リラックスした笑顔で、自分の子どもたちと同じ年ごろの学生たちを見かけると話しかけた。「私の前妻も子どもたちを児童クラスに参加させています。将来子どもたちが私のように過ちを犯し家庭を壊して後悔の淵に陥ることのないように願っています」。

「世の中に悪い人はいない、過ちを犯した人だけがいる」という證嚴法師のお諭しを劉邦洲はよく覚えている。以前は人の借りた闇金を返済させるために、

二十〜三十人のヤクザを連れて、あちこちで悪事を働いた。昔と今の生活を比べると彼は今安堵を覚えるという。「慈済人と一緒に善行を行うととても幸せです。以前は、いつも警察に捕まるのではないかと怯えていました」。

劉邦洲は「二度と過去の過ちを繰り返したくない」と決心した。また黄明月と呂明煌ら慈済ボランティアたちの導きにより、一歩一歩新たな人生の道を進んでいる。「天国にいる母を慰めるため、僕は母からもらったこの身体で、人の役に立つことをしていきたいと思っています」。(慈済月刊六二七期より)

高齢者は問題ない

喜んで奉仕し、年を忘れ、社会の役に立ち、敬愛される年配者になる

文・葉文鶯 訳・惟明
撮影・顔霖沼

ハンググライダーのように 晩年を優雅に飛ぶ（上）

兄弟と日夜交代で介護してきた父親の最期を見送った。彼はその時、自分は「最後の枕元の孝行息子」だったことに安堵して肩の荷を下ろした。自身は「老後のために子を育てる」と言う古い考えは持っていない。一人で老後を迎えることについて、体は若い頃のように戦

闘力が高くなくても、設定された航路に沿って、エンジンがないハンググライダーのように、のんびりと飛行し、ソフトランディングできることを望んでいる。

●●毎日朝晩、陳漢鈞はプールでラップを重ねながら泳ぐ。体を鍛え、これから先はハンググライダーが風に乗る優雅にソフトランディングするが如く、自立した生活を受け晩年を迎えたいと考えている。



冬

至にお団子を食べると歳暮も近い、自ずと嫌でも「歳月」が進んでいることを感じる。陳漢鈞は出勤前の時間を利用して、独居の父親にこの季節に食べるお団子を届けた。

満七十二歳と一日になろうとしたあの日、父親は自分の体に異変が起きたことも知らず、古くなった日本風の教員宿舎の玄関先にある階段を上ろうとして前足を上げたが、後足が動かず、そのまま立ち往生してしまった。息子の顔を見て苦笑すると「おかしいな、足が上がらない」と言った。股下が濡れて、足下に水溜まりができていた。

その時はそれまで送ってきた父親の静かな生活だけでなく、自分にも関わってくるとは思ってもなかった。老い、病い、死という悩みが始まろうとしており、そしてそれは止めることができないものだった。

突如天井が人生のすべてに

「おかしい、どうしてこうなったのだろうか」と陳漢鈞はまず父親を椅子に座らせながら考えていた。様子を見に来た隣の人は、転んだわけではないので早く医者に行った方がいいと勧めてくれた。

「お父さんは脳卒中です」という医者の診断を聞いた時、初めは薬を飲んで何日か寝れば良いと思った。何年か経って当時の自分にはその程度の医学知識しかなかったことを笑い話にしたが、左半身が「マヒ」した父親は、以後ベッドで「天井を見るだけ」の介護に頼る人生に直面していたのだった。

母親が早くに亡くなってからこれまで父親はずっと一人で暮らしていたので、息子たちは毎日の生活と身の回りの世話だけをしてやればよかった。一九八八年、父親が脳卒中で倒れた時の台湾はまだ外国籍の介護者を雇うこ

とはできなかった。台湾人の介護者を雇う場合は日当が二千元（七千円相当）、その上父親には大人用オムツに長期的な費用がかかるため、経済的事情からとてもではないが介護者を雇える状況ではなかった。

「病気が長引くことで孝行息子もいなくなることは我が家では絶対にありえません」陳漢鈞の三人兄弟は父親を老人ホームに送ることは考えなかった。兄弟の一人は仕事で花蓮に住んでいなかった。そこで、父親の世話は彼と花蓮在住の二番目の妹が主になることになった。

「今後夜勤は私に全部やらせて下さい」

とホテルのフロント係をしていた彼は自ら上司にシフトの調整を申し出た。こうしたことで妹は昼間仕事ができ、少なくとも二つの家庭に影響を及ぼさず済んだ。父親の世話をする為に、妹一家を実家に引き取った姑の度量に陳漢鈞は深く感動した。

妹が八時に仕事に出かけられるよう、陳漢鈞は毎朝七時に夜勤を終え、真っ直ぐ父親の家に向かった。彼は父親の朝食、トイレ、入浴を済ませた後、手作りの吊り輪で父親の左手を鍛えたり、右手が萎縮しないようにキャッチボールの相手をしたりして、リハビリを手伝った。

「おい！死にたいのか！」と耳を突く罵り声とクラクションに慌てて目を覚ますと、いつの間にか自分の車が対向車線を走り、前の車に衝突しそうになっていた。ホテルの夜勤と朝から晩まで父親の世話で十八時間休み無く働いたあと、父親をリハビリ・センターから家に連れて帰る途中のことだった。彼は疲れ果てていたのだ。

「自分のほつぺたをつねっても、三十秒もしないうちにまた居眠りをしてしまいました！居眠り運転をしている間、きつと神様が代わりに運転してくれたのだと思います」とその頃、四、五年間を

運動をして疲れた時は父親をベッドに休ませると、陳漢鈞は側の床で仮眠を取った。ちょっとした父親の動きにも直ぐに気づくように、彼は熟睡することはなかった。昼食の後、彼は雨風も厭わず車で父親をリハビリセンターに送っていく。リハビリを続けた結果、父親はやつと杖を使って歩けるようになった。

一息入れる暇もなく 日夜続ける

父親が少しずつ歩けるようになった頃、陳漢鈞は毎日のように危ない目に遭っていた。

無事故で過ごせことを菩薩に感謝しているという。

妹が仕事から帰ってきて、晩ご飯の支度をする。父親にご飯とリンゴのすり身を食べさせてから、陳漢鈞は十時の出勤時刻を前に一度家に帰って仮眠をする。それが一日の中で妻と息子に顔を合わせる僅かな時間だった。

「ご飯の時間になっても起こさないでくれと妻に頼みました」と陳漢鈞は言っていた。彼は父親より早く倒れなくなかったのだ。

断続的に仮眠をとつても一日の睡眠時間は合計四時間足らずで、睡眠も浅いの

で十分休んでいるとは言えなかった。「人間は鋼鉄でできているわけではありません。幸いにしてまた四十歳代だったので、何とか持ち堪えました」と陳漢鈞が言った。台東で教鞭をとっている弟夫婦は毎週金曜日になると帰って来て交代した。それは日曜日の夜まで、彼と妹にとっての息抜きの一時だった。

認知症は家族を困らせた

冬至にはいつものお団子さえ食べられなくなっていた。歳月は父親をそのままにはしておかなかった。脳卒中になっ

てからの父親は明らかに衰弱し続けた。ある日、陳漢鈞が晩ご飯の片付けをしていた時、父親は真剣な顔で彼を呼んだ。「おい来てくれ、大切なことを話したいのだ」「何？」

「ご飯はまだか？」

「はい、今から用意しますよ」と陳漢鈞は返事したが、父親は直ぐにご飯のことを忘れてしまっていた。その後、父親は脳卒中による認知症だと診断された。

父の時間がどれほどあるのかわからなかった。中国で暮らしている叔母が見舞いに来られるよう申請した。長年離れ離れだった兄妹が再会できるのは感



無量のことだろうと思っ
てそうしたのだが、「貴女
は年取っているから、妹
ではありません！記憶の
中の妹はまだ十八歳です」
と父親は言った。当時故
郷から逃げ出した時、叔
母さんはまだ三つ編みの
少女だったのだ。人は一
旦記憶を奪われると、気
持ちも消えてしまうのだ
ろうか。

●手にしているのは父親の写真。毎日兄弟で力を合わせて父親を介護した陳漢鈞に悔いはなかった。年をとって独居している彼の望みは、息子が安心して外で働けるよう、心配をかけないことだという。

その上、父親は病気になってから体内時計が日夜逆になったので、介護する人の体力も限界に近づいた。兄弟で暫く頑張ったが、ある時もう支えきれなくなつて、兄と弟を呼び戻して相談したところ、兄が「老人ホームに入れよう」と最終決定を下した。

父親が身近にいないとかえつて気になった。ある晩、陳漢鈞は耐えきれず、同僚に頼み、仕事場を抜け出して父親の様子を見に行った。夜中の一時、二時だったが、彼が目にしたのは、父親が目を開けたままベットに手足を縛り付けられている光景だった。

「私は何も悪いことをしていないのに、どうして縛り付けるのだ！」と父親はいく晩もつらい思いに耐えてきたと話した。彼は悲しくて涙を流しながら自分を責めた。そして、「明日連れて帰ります」と近くにいた介護の人にきっぱり告げた。考えてみれば老人ホームは人手不足で、細かく介護するのは不可能だったのだ。これも仕方の無い現代の社会現象である。

精一杯介護する

父親は人生の最期に大腸癌に侵され、

人工肛門は毎日洗浄しなければならなかった。そして寝たきりなので誰かに体を起こしてもらって背中を擦ってもらわなければならなかった。父親が病いに侵されるのを見るに忍びなかった陳漢鈞は、長時間装具を留める絆創膏で人工肛門の周りの皮膚が赤くなるため、代わりに木製のリングを考案した。それは使い勝手がよく、介護士が同じ病室の患者にも勧めるほどのものだった。

五年間、父親の介護に細心の注意を払ってきたため、父親は亡くなるまで一度も床擦れができたことはなかった。「老人ホームにいた一ヶ月を除き、全て私達

が介護しました。それこそ精一杯でした」。精一杯父親を介護したゆえに、今になつても悔いは残っていない。

父親の一生をふりかえると、戦乱のため生まれ故郷から逃げ出すことを余儀なくされ、転々とした後、花蓮に落ち着いたのである。中学校で教鞭を執りながら、学校以外でも臨時講師を兼任し、我々兄弟六人を育て上げた。学生数は相当多かった。タバコの匂いに満ちた部屋の中で父親がタバコを片手に学生の作文を赤鉛筆で修正する姿を夜中に起きてトイレにいく途中に見かけたことがあった。

戦乱から逃げ回る時代は既に終わって

いたが、父親は依然として周囲を警戒していた。陳漢鈞が毎日会いに行っていたにもかかわらずスペアキーを渡さず、お客さんのようにいちいち外から父親を呼ばなければならなかった。

ある日、窓が外から開けられるのを見て、父親に「次からどこから入るかわかりました」と冗談を言ったら、翌日からその窓が金属ワイヤーで固定されて開けられなくなっていた。父親は日頃家においてもドアと窓を締めきっていたのである。定年後は友達付き合いはなく、運動や旅行もしなかった。唯一の趣味は読書とテレビを見ることだった。

なぜ父親の世界はこんなに孤独だったのか。病気になるたお陰で子供たちはやつと側にいてあげられたのだが、これは父親にとって果たして慰めになったのか嘆きになったのかは知る由もない。

五十歳になつて散髪の見習い

父親の介護をしていたことで陳漢鈞は後日、特殊なボランティア奉仕をするようになった。

父親が亡くなった後、陳漢鈞は生前父親の散髪に使った道具を見て、こんなに揃っているのだからと散髪を習うと言

出した。

「何でもいいのに、どうして床屋の見習いなの？」と妻に分かつてもらえなかったが、陳漢鈞はあちこち聞いて回った。台湾の古い社会では弟子入りするのは十何歳から二十歳が普通だったので、五十歳になつて弟子入りを申し出ても、弟子に取ってくれるところはない。幸いに不定期に開催されていた地域の職業訓練クラスの科目は多種多様だった。

陳漢鈞は遊び半分の気持ちだったので、職業訓練を受けて免許を執り、床屋になるとは考えてもいなかった。すると申込者が少なかったので、散髪クラスを

開講することができないと言われ、代わりに女性理容クラスを勧められた。

「女性の理容を習ってどうするのだろう」と最初は戸惑いを感じた。しかし主催者が受講料の値引きをしてまで勧めてくれたし、男性の理髪クラスが開講するまではどうせ待たされるので入ることにした。

職業訓練クラスの中では最も年長で修得は遅いが、心を込めて勉強した末、女性と男性の丙級（三級）理容免許を取得した。当時、慈済大学のプールでライフガードもしていた彼の最初の顧客は、同僚の病気になるた父親だった。

●温かい髪の縁

陳漢鈞は自宅のリビングで無料の床屋を開業している。壁のカレンダーは予約で一杯である。客がぜんざいを持ってきたり、散髪後、自分たちで床を掃除して部屋が人情の温かさでいっぱいになるため、彼は年をとっても寂しさを感じることはない。



続く（慈済月刊六二七期より）

【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・林錦濤



水滴が集まって河となり、海に注ぐが如く、
苦難の衆生を慈悲の舟で彼岸に渡す

人々の心に愛を啓発し、

それは一滴一滴と流れて江河となり、

流れを絶やさず大海に注げば、

慈悲の舟で苦難の衆生を彼岸へ導くことができる。

今

年三月、サイクロン・イダイ
がアフリカ東部を襲い、マラ

ウイ、ジンバブエ、モザンビークの

三国が甚大な災害を被りました。粗

末な住居は強風と洪水に耐えられず、

長期にわたって飢餓寸前に陥ってい
た住民は被災後、更に苦しい生活を
強いられました。

南アフリカの慈済人は二泊三日掛
けて二千キロ離れたマラウイに支援

に行きました。この世の菩薩は苦勞を厭わず、部落の酋長と共に人々を導いて家を建て直し、被災した老弱男女を安住させました。

ジンバブエの首都に住む朱金財居士は、四百キロも離れた被災地の住民を支援するために、老朽化した車にボランティアだけでなく、パンと浄水薬を積んで出かけました。道路状況は悪く、寸断された道もあり、夜は真っ暗で星空を仰いで野宿しました。

愛に満ちたボランティアたちは樂觀的で、「もう帰ろうよ」と言う人は一人もいませんでした。苦勞をものともせ

ず、堅い意志で前進し、衆生が苦しみから逃れられることを願い、自分たちの安樂は求めませんでした。

モザンビークもまた容易ではなく、首都から千キロ以上離れたベイラは大きな被害を受け、被災後一時、民間機の飛行が禁止され、救済人員を乗せた軍用機だけが飛んでいました。慈済ボランティアのデイノ・フォイが軍用機で被災地に行つてから被災状況が伝えられ、慈済人はようやく状況を知ることができました。

被災者たちは無言のまま、壊れた家々の瓦礫の中に立つて天を仰いでい

ました。避難所には数万人が入り、粗

悪な衛生環境の中で救済品に頼る日々を過ごしていました。デイノによると、四十四人がコップ一杯の豆を煮て作ったスープで一日を過ごす人もいました。被災後は食料が不足しているだけでなく、浄水や医薬品不足に伴って公共衛生問題が起こり、遂にはコレラが発生しました。

被災者の苦痛の聲が棄てがたく、救済に赴く人たちの安全も心配でした。第一線で使命を果たし、別の団体の人たちと協力して慈済支部で生活用品を梱包し、千キロ余り離れた被災地まで

送り届けてくれたことに感謝します。

この大きな国際的な災害支援には、物資をどのような経路と輸送方法で送り届けるかという困難が立ちはだかつていました。現地に倉庫はあるのでしょうか。ボランティアはどうやって順調に被災地に入り、無事に帰ってこられるのでしょうか。同時に異なる国のボランティアが一緒になって方法を考えました。また、五十二の国と地域でボランティアが支援に呼応してくれたことは感謝にたえません。「水滴も河になり、米粒も集まれば俵になる」と言われるように、軽い気持ちもちよっ

とした奉仕も苦難に喘ぐ人たちにとっては、必ずや救いになるのです。

トルコではマナハイ国際学校の生徒が災害支援のために、次々とこずかいを寄付しました。このことをシリア人の教師や大人は子供たちに話して聞かせました。これらアフリカの住民が貧困の上に酷く被災し、住む家を無くしたという苦しみは、戦乱を逃れて異国に流浪している彼らと同じであり、そのやるせなさを思いやることが出来るだろうと考えたのです。

このシリア難民の子供たちは普段からこずかいを節約し、慈済が支援活動

を行っていると知ると、直ちに呼応しました。この数年、一度も欠かしたことはありません。何処に災難が発生しても彼らの心はそこにあり、その相手を思いやる心はとても価値のあるものです。彼らは異郷に逃れ、暗くて粗末な家に住んでいても、愛の心は明るいのです。人生の中に愛があれば光輝き、愛を伴った光りは千年の暗闇までも照らすことができます。

慈済がハイチに関心を寄せてから十年余りになります。貧困救済の配付活動と学校の支援建設で現地人ボランティアを育ててきました。今回、アフ

リカの災難を聞き、ハイチの彼らが勇猛に寄付した二千台湾元相当のお金は、すべて、彼らのポケットにあった唯一だったのです。容易な事ではなかったでしょう。誠に心打たれます。

東アフリカの苦難に喘いでいる人たちが必要としている助けを大衆に呼びかけるために、北区慈済ボランティアと台北慈済病院は共同でチャリティーコンサートを催しました。李仁甫と高原の若い二人は静思晨語でそれを聞くと、直ちに「愛の流れをつなごう」という新曲を作って会場で披露し、会場の聴衆が一緒に合唱しました。

苦難の人々が暮らす暗くて太陽の届かないような所にどうやって希望の光りを射し込ませたらいいのでしょうか？手を差し伸べ、「水滴が集まって河となる」ように愛を繋げることが「苦難の人々を彼岸に渡す」唯一の方法なのです。しかし、それが一時限りの活動で終わってはならず、持続して人々の心に愛を啓発しなければなりません。河の流れのように途切れることなく、暗闇にいる苦難の人々に明るい灯をかざして上げることです。皆さま、心して精進しましょう。

（慈済月刊六三〇期より）



心深く愛を植え付ける

大衆の愛を啓発することで湧き続ける泉にする。それがうわべだけの縁のまま、ひとたび風が吹いたり手を叩くだけで消えてしまうようであってはいけない。

◎文・釋徳侃／訳・済運

喜びに満ちた健康な細胞を育む

大愛テレビ局の番組「高僧伝」の中の「最澄大師伝」の撮影のため、先日、唐美雲師姐は歌劇団^{スーゼ}を率いて日本の比叡山を訪れた。帰国後彼女は、凍て付く雪の降る日に困難を克服して撮影した時の話と、そこで高く上げた右手で「三」を示していた菩薩の石像を見つけ、それには三つの願を掛けた意味があることを語ってくれた。

「二つ目は道心を持った人になり、仏陀のようになること、二つ目は善行し、良い言葉を口にする人になること、三つ目は社会の暗がりを照らす人になることです。どんな環境にいても、機会さえあれば奉仕し、精一杯、力を発揮して人助けすることです」。

「高僧伝」の撮影チームは、地道に大師の修行軌跡を訪ね、大師が一心に志を立てて心から専念したことではじめて、困難を乗り越え仏法を広めることができたことを見証したのです」と上人は言った。また、番組が表現する高僧の物語、台詞、演技の全てを参加者が心に銘記し、世の衆生のために発心立願すると共に、どんな環境にいても決して変わることはない固い決意を持つよう望んだ。

「石像菩薩の三つの願である、道心を持つ人、善行する人、良い言葉を口にする人、社会の暗がりを照らす人になることは慈済人の目標でもあり、普段からそれを目指して努力しなければいけません」と上人はボランティアに開示した。

「私が出かけて行く必要もなく、皆が私の行きたい所に行き、私のしたい事をし、私の言いたいことを言ってくれることを、いつも本当に幸せだと思っています。慈済人は善行して良い言葉を口にする

だけでなく、良い願を發し、愛で以て暗がりを照らし、人々の心を開いて良い方向に心と行為を向けてもらうのです」。

また、「仏は靈山にあり、それは遠くに求めるのではなく、心の中にあるのです」と強調している。修行とは修心養生と端正な行いに重きを置き、心を無限に広く持ち、あらゆることを受け入れるべきです。「人体は計り知れない数の細胞から成り立っており、心が安らかで楽しければ、細胞も喜びに満ちて健康になります。もし、煩悩が起きて体の細胞の機能が調和を保てなくなれば、病気になってしまいます。従って、愛を育んで見返りを求めず奉仕することで社会を利し、無私の人助けをして喜びを感じ、体の細胞を健康に保つことが大切です」と語った。

活発であつても優雅さを失わない

宗教處主任の報告を聞いた上人は、「慈濟の活動が活気に溢れる

のはいいことですが、優雅さを失つてはいけません。多くのボランティアを動員して時間と経費を使って活動を行うのですから、活動の主旨を明確にし、愛を啓発して一緒に善行する目的を達成させなければいけません」と言った。

「純粹な愛を募る活動は人々の心に愛を深く植え付けることができ、そのような活動は最も成功したものであるでしょう。そして、集めた募金の多少にかかわらず、慈濟がどのように社会を利し、どのような人を助けたかを人々に知ってもらう必要があります。人々に因果関係を説明し、良縁を結ばなければいけません。その縁がうわべだけのまま、風が吹いたり、手を叩いただけで消えてしまうようであつてはならず、その愛を湧き続ける泉にしなければいけません」。

「若い人は説法を聞くのが苦手なため、活動を通して皆で迎え入れ、法を心に取り入れると共に法脈宗門の精神を理解して共に菩薩道を歩むことを願うように導くとよいでしょう」。

唐美雲師姊の団員である美術設計士の楊世丞さんは、ペットの猫を動物病院に連れて行った時に、ガチョウを家族のように可愛がって世話している人を見かけた。その後楊さんは食卓にアヒル料理が出た時に病院での様子を思い出し、もし自分の猫が料理になったらどう感じるだろうと思ったそうだ。彼は「高僧伝」の撮影期間中、菜食を続けたが、その後直ぐに「七月吉祥月」の經典劇を演出することになり、それを機会にずっと菜食を続けている。

「楊さんは自分の反省と心の変化と共に仏法の影響下で生命の尊重と衆生の愛護を実際の行動で表しました。若者に『生命を尊重する愛に感謝しよう』と教えようとしても、古くさいと思われたり、仏法は余りにも難しいために尻込みしてしまうかもしれません。映像を通して実例や統計の数字を使い、浅い道理から深いものへと、若い人に感動を与えながら啓発することで、共にこれらの知識と認識を携えて行動してもらいうことが出来るのです」と上人は言った。

（慈濟月刊六二九期より）

慈濟大記事五月

・・・・・・・・・・・・・・・・

訳・済運

05・01	慈濟基金会は1日と13日、17日に夫々、法務局矯正署所属の台北、嘉義、台東にある刑務所と共催で親孝行と善行の觀念を提唱する灌仏会の活動を行い、900人余りが参加した。台北の活動ではこの他に音楽手話劇《父母恩重難報經》が催された。ボランティアはその4ヶ月前から受刑者たちに經文の内容を解説し、動作を教えて仏典の意味を理解することを期待した。
05・02	◎慈濟基金会は台湾盲人重建院で、手に職を付けるためのマッサージ師養成講座を支援して4年目になる。本日、基金会の張宗義副執行長と当院の曾瀚霖董事長が公益協力覚書きに署名した。 ◎慈濟科技大学医学映像及び放射線科学部の教師と学生たちは、2日から4日まで第30回マレーシアITEEX国際發明展に参加し、「恋人の涙（イシクラゲ）を栽培する装置」と「傷に修復する効果がある恋

05・03	人の涙（イシクラゲ）繊維膜」などの発明で2つのゴールドメダルを獲得した。 ◎慈済ヨルダン支部は2日から12日までラマダン時期の物資配付活動を行った。今回は台湾からのボランティアが14人参加し、サグラット、アルバシ、ワディフィンナン、ヨルダン溪谷及びアンマンなど10の地点で1858世帯に配付した。 ◎カナダ・トロントの慈済ボランティアはトロント・アラブコミュニティセンターのスカボロー連絡所で、中東からの新移民と低所得者80世帯に対して棗と蜂蜜、砂糖、オリーブオイルなどのラマダン時期中の食品を配付した。
-------	---

05・06	を対象に1世帯当たり25キロのトウモロコシ粉を配付した。 ◎慈済基金会は引き続き2018年のラオス・アタポー州で起きたダム決壊事故の被災住民をケアしている。本日、台湾とタイの慈済ボランティアと職員はパクシ中華理事會が率いる華僑団体と共に、サナムサイ県ドンバク村でドンバク村とハドヤオ村の480世帯にインドネシア実業家が寄付した折り畳み式テーブルセットを届けた。 アメリカ慈済総支部は6日から9日までテネシー州ナッシュビル市で行われる第27回全米災害支援ボランティア協会の年次総会に参加した。そこでは夫々の団体が防災や災害支援、被災後の再建、州を超えた共同作業などに関する研究や意見交換を行うと共に、気候変動を主題にした座談会が設けられ、災害支援の経験を分かち合った。また、慈済はエコ毛布などを展示し、プラスチックの回収と再生技術を報告した。
-------	---

05・08	4月27日から5月8日まで第118回パリ国際発明展（Concours Lepine）が開かれ、大愛感恩科技公司在「大愛エコ衣料プラ木材」でゴールドメダルに輝いた。
05・09	カンボジアの慈済ボランティアは9日と10日にプノンペン市ダンコールごみ埋め立て地とプノンペン市青年団支部で624の貧困世帯と263人の貧困家庭の大学生に台湾政府の対外支援米を配付した。
05・10	◎モザンビークにおけるサイクロン・イダイ災害支援団が教育支援活動を行った。本日、ナマタンダ地区のラメゴ村とティカ村、ナマタンダ村、ナルチョンダの学校でカバン、文房具を学生に配付し、米と豆などの物資を教師に配付した。20日までに支援した人は26600人を超えた。 ◎4月22日、フィリピンのルソン島でマグニチュード6・1の地震が

05・12	発生し、慈済フィリピン支部は10日にパンパンガ省ポラク町とディアズ区、ヴィラマリア区、イナラロ区の被災者に米とトウモロコシ粉、鍋、ゴザ及び見舞金を500世帯余りに配付した。 ◎慈済53周年三節一体の日、「仏誕節、母の日、慈済の日」を祝う灌仏会が「生命を尊重する愛に感謝し、和して争わず、共に福縁を結ぼう」の主旨の下に全世界で行われるが、先ず、證嚴法師を先頭に花蓮の静思堂で行われた。今年の行事も環境保全の特色を前に出し、各地の会場には「環境保全芸術品」が展示された。例えば、回収したペットボトルで作られたエコ地球や水立方といった模型が設置され、エコカーネーションや再生ガラスで作ったリングなどを無料配布して、プラスチックの使用削減や菜食による生命愛護、親孝行などを訴えた。灌仏会は13日までに世界39の国と地域で催され、合計535回の灌仏会と59回の親孝行活動が行われ、24万人が参加した。
-------	---

05・22		
	05・19	台湾ロータリークラブ公益ニュースゴールデンホイル賞」のテレビニュースメディア報道賞大衆向け題材部門で最優秀賞を獲得した。
		モザンビークのサイクロン・イダイ災害支援活動で、19日から23日までソファアラ省ティカ、ラメゴ、ベイラ及び首都のマプトで大規模な施療活動が行われた。台湾、アメリカ、オーストラリアなどからの慈済人医会メンバーと台湾花蓮、台北、対中大林の四つの慈済病院の院長らが率いる医療チームと当国の医療人員が協力して内科、外科、産婦人科、小児科、歯科、漢方科の診療奉仕が行われた。
		慈済基金会はイタリア、ローマで開かれた国際カリタスの第21回大会に参加し、慈済アメリカ総支部の曾慈慧副執行長と慈済基金会執行長室職員の黄恩婷が代表で22日のカリタス女性フォーラムに出席し、慈済の女性平等権に対する見方を報告した。また、23日から28日までの大会期間中に他の団体と交流し、意見交換をした。

05・16	05・15	05・12
大愛テレビ局はニュース報道番組「一滴の水も無駄にしない」で「2019	慈済モザンビーク・サイクロン・イダイ災害支援団は4月26日より、ナマタンダ、ティカ村とラメゴ村、ブジ町グアラグアラ区で家屋の再建と農耕再開支援のために、「建材農作業パック」とトウモロコシ粉、種子、鍋、鋤、鋸、金槌、鍬、バケツなど10項目の物資を16688世帯の被災者に配付した。	◎慈済基金会は12日から14日までベトナム・ハナム省タムチュク寺で行われた国連仏誕行事ヴェサクに参加し、静思精舎から徳澍師匠と徳淵師匠、職員の黄恩婷、劉秋伶及び慈済ベトナムのボランティアが代表で出席した。慈済が提出した「生活に密着した環境保全、永遠に続く慈悲心」と題した論文が認められ、大会の発表論文として掲載された。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL: 55-11-55394091

イギリス London
TEL: 44-20-88699864

フランス Paris
TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg
TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam
TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg
TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna
TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng
TEL: 27-11-4503365

中国蘇州
TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh
TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL: 95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL: 604-2281013
Malaka
TEL: 606-2810818

シンガポール
TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta
TEL: 62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota
TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman
TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul
TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈済

2019年6月19日発行・270号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・王麗雪

校閲 黒川章子

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



最高の笑顔 地元ボランティアの力

サイクロン・イーディが東アフリカ・モザンビークに大きな被害をもたらした。首都マプトゥ市の慈済ボランティアは災害支援を始め、重大な被害を被った中部のヤマ郡で物資を配付し、被災した女性を慰めた。

(文&撮影 蕭耀華 2019.4.7)



慈済ものがたり